

分担学習の提案

豊原大成（とよはら だいじょう）

「自信」恢復・増進のために

宗祖七百五十回大遠忌の最大の課題は「自信教人信」でしょう。しかしその「自信」が僧侶の間で弱くなっているように囁かれています。そこで「自信」の恢復ないしは増進の方法として、更には布教伝道の単調、画一的現況から脱却して幅と深みを造成するために、かねて私が考えているのが「分担学習」です。

数年前、ある教区の僧侶研修会に参上したとき、たまたまその教区の組数が十以下だったので、私は「一組で七高僧全部は難しいでしょうが、各組で七高僧それぞれを分担して勉強されたら、教区全体として見た場合、七祖全体に就いて強力になる。また龍樹菩薩なら甲組に聴こう。天親菩薩なら乙組が専門だと、教区全体が教学の面でも血が通うのではありませんか」と提案しました。

その後、その教区で、どのような仕方の勉強が行われているか存じませんが、同じ頃、口頭で、総局に対し、例えば伝道院で龍樹コース、曇鸞コースと言った具合に、コース別専攻など考えられないかと進言したことがあります。しかし「先生が居ないでしょう」の一言で、まあ却下されました。

しかし私に言わせると先生は沢山居られる。何も最初から、龍樹なら龍樹の教学を全部マスターしてから龍樹コースを教える必要など無い。そもそも龍樹や天親の全貌、全容など、一生涯かかっても学びきれものではない。だから先生は極端に言えば、教授する部分について受講者より、ほんの数歩先んじながら、一緒に勉強すればよいのです。小生なども自坊での毎朝勤で、今しがた読誦した聖教にもとづきながら五分～十分程度の法話をするのに、必ず前夜にそれなりの予習をしている。それでなんとか参拝者だけでなく、それ以上に私自身のためになってきていると思っています。

分担学習の例

ところで今、七祖各師の分担学習を例示しましたが、あながち七祖と限る必要は無い。『大経』上、『大経』下、『観経』、『小経』と三部経勉強会を四人のグループで行うとか、『御本典』を「教・行」「信」「証・真」「化」文類など数人で分担するのもよいでしょう。しかし『御本典』は約二十経、四十論の引用がありますから、その出拠まで、きちんと探査するとなると大仕事ですね。

なお、七祖と言っても、龍樹の場合、「易行品」と「十二礼」だけでなく、少なくとも『十住毘婆沙論』十七巻全部は守備範囲とすべきでしょうし、天親菩薩なら『浄土論』だけでなく、出来れば『俱舍論』など視野に入れると面白い。逆に善導大師などは五部それぞれを分担すべきかもしれません。

宗祖の御撰述でも、日常読誦する「三帖和讃」を三人で一帖ずつというやり方もあります。

但し一帖が、たかだか百十数首でも、『浄土和讃』の場合、曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』をはじめ、『三経』、『涅槃経』、『法華経』、『金光明経』、『首楞嚴経』などの諸経によって御和讃を跡づける必要がある。また『高僧和讃』ならば七祖各々の御撰述中に出拠を検出するべきだなど、これまたなかなか大変な作業です。

しかし、だから勉強に手がつかないというのでは駄目です。英語学者の英語も子供のしゃべる英語も、共に英語である。学者のようにしゃべれないからといって、英語を一切しゃべるまいと決めるべきでは

ありません。

“聖教を読み破る”

三経や七祖、宗祖、列祖の御撰述を、自分なりに学び、味わう。これが失われかけている「自信」（信心と信念）の恢復、増進への道であります。そしてそのために最も手近な書物、それが昭和六十年から刊行を継続してきた一連の『浄土真宗聖典』であり、殊に平成に入ってから出版された二冊の『注釈版』でしょう。

折角、各種法要の記念事業の一環として、宗派から全寺院に無料進呈されたこれらの聖典ですが、実はこれが愛読、拝読、味読されること無く、書架の片隅に「つんどく」乃至は死蔵^{ないし}されている例も皆無とは言えないようです。僧侶が“聖教を読み破る”ことこそ、宗門の未来^{ひら}を拓く第一歩です。お聖教それぞれに参考書もあることと思いますが、基本的に大学で真宗学や仏教学専攻程度の学力を以ってすれば、殊に辞典の援用により『注釈版』などでの独習独学もある程度可能なはずです。

つまり教学という巨大な山塊をただ漫然と座視し、その克服を一部の学者にまかせているのではなく、一般の住職、僧侶も参加して部分部分を分担学習する。そして各自がたとえ短いお聖教であっても誰にも負けない専門家になる。このことが一人ひとりの僧侶の自信、ひいては宗門全体の教学、伝道、信仰のレベルを高めることにつながると思うのです。

宗祖の御跡を辿るために

なお、ついでに申しますと、梵語文献や西藏、南伝などの大蔵経は別の話にして、大谷本廟にお墓のある高楠順次郎博士（1866－1945）等を中心に編纂された『大正大蔵経』百巻のうち図像部、目録部等を除く八十五巻は、一卷平均千頁と見做すと合計八万五千頁になります。その第八十三巻の後半四百頁弱に、『御本典』六巻以下、御当流関係の三十四篇が収録されています。そして私共が最も親しんでいる『佛説阿弥陀経』は第十二巻に一頁と三分の一、「正信念仏偈」は第八十三巻に三分の二頁で合わせて『大蔵経』二頁にしかなりません。

それに「讚^{さんぶつげ}仏偈」＝三分の一頁、「重誓^{じゅうせいげ}偈」＝三分の一頁弱のほか、平常読誦の和讃、拝読用御文章を加えても、『大正大蔵経』五～六頁分にしかならないでしょう。これだけすら自家薬籠^{じかやくろう}中のもののできないようではその人生は余りに勿体ないし空しい。

宗祖九十年の御苦勞を謝する大遠忌まであと三年、その間に、あるいはそれを契機として私たち住職・僧侶一人ひとりが、どこまで宗祖の御跡^{みあと}を辿り得るか、それによって我が宗門の未来も決まるのではないのでしょうか。

（本願寺築地別院輪番・宗会議員）